

九州国立博物館

紀要「東風西声」第20号 抜刷

2025（令和7）年3月

叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について(5)

化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髷箱）

川 畑 憲 子
渡 辺 祐 基
田 中 麻 美



原色図版27 櫛箱



原色図版26 櫛台



原色図版29 元結箱



原色図版28 払箱



原色図版30 髷箱

叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について(5) 化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髷箱）

川 畑 憲 子
渡 辺 祐 基
田 中 麻 美

はじめに

「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度」（以下、本調度、＜表 1＞）の CT 撮影によって判明した木地構造について報告する。本調度の概要は紀要16号でも記しているため詳述は避けるが、江戸時代中期に制作された婚礼調度で、叢梨地に牡丹唐草文を大きく配し、所々に向鶴紋を散らしている。作者、所用者などの詳細は明らかでないものの散逸の少ない大名婚礼調度としてかねて著名な品で、2001年に国有品となり、現在は九州国立博物館が保管している。

筆者は、江戸時代に制作された婚礼調度の CT 撮影による木地構造調査を行っており、本調度についても継続的に調査を行っている⁽¹⁾。本稿では今年度調査が完了した化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髷箱）5 件（＜表 1＞の 9～13、原色図版26～30）について、その結果を報告する。

＜表 1＞

	名称	種類	員数	法量	内容品
1	厨子棚	棚	1 基	幅99.2 奥行39.9 高79.6	
2	黒棚	棚	1 基	幅78.0 奥行39.4 高68.3	
3	鏡台	化粧道具	1 基	総高65.3	附子箱 3、油桶 1、鬢盥 1
4	鏡建	化粧道具	2 基	(大) 総高75.0 (小) 総高56.6	
5	柄鏡箱	化粧道具	3 合	(大) 長径55.6 (中) 長径39.5 (小) 長径33.4	柄鏡 (大・中) 2
6	十二手箱	手箱	1 合	縦33.7 横26.8 高21.9	鏡箱 2、櫛箱 3、白粉箱 4、油入 2
7	大角赤手箱	手箱	1 合	縦37.2 横29.3 高25.3	
8	角赤手箱	手箱	1 合	縦28.5 横23.0 高21.2	
9	櫛台	化粧道具	1 基	縦24.5 横34.9 高35.7	鏡 1、鏡箱 1、白粉箱 3、棗形化粧合子 2、 四方化粧合子 1、筒形油桶 2、鬢水入 1、 耳盥形化粧水入 1、銀製潼子 1、紙落 1
10	櫛箱	化粧道具	1 合	縦17.7 横15.2 高14.8	櫛 3
11	払箱	化粧道具	1 合	縦31.0 横35.0 高21.5	櫛33
12	元結箱	化粧道具	1 合	縦24.5 横22.5 高19.5	元結 2
13	髷箱	化粧道具	1 合	縦90.5 横19.8 高15.8	
14	爪切箱	化粧道具	1 合	縦17.3 横12.3 高4.2	爪切刀 2
15	眉作箱	化粧道具	1 合	縦29.0 横21.8 高25.8	刷毛筒 8、こね墨入 2、際墨 3
16	歯黒箱	化粧道具	1 合	縦14.5 横12.3 高15.0	銀製鉋子 1、銀製潼子 1
17	渡金箱	化粧道具	1 合	縦41.0 横9.8 高10.1	銀製渡金 2
18	角盥	手水道具	1 口	長径60.5 口径42.2 高24.0	
19	耳盥・台輪	手水道具	1 具	(耳盥) 長径34.2 口径25.4 高16.4、(台輪) 径28.3 高26.7	
20	湯桶・盥	手水道具	1 具	(湯桶) 長径37.5 径19.6 高22.2 (盥) 径52.0 高19.7	

21	手拭掛	手水道具	1 基	総高62.5 幅70.0 奥行25.0	
22	嗽茶碗・台	手水道具・化粧道具	1 具	(碗) 径17.9 高12.2、 (台) 方26.7 高24.1	
23	昆布箱	化粧道具	1 合	縦13.8 横12.2 高8.6	
24	料紙箱	文房具	1 合	縦41.3 横32.0 高15.6	
25	硯箱	文房具	1 合	縦24.5 横22.0 高4.3	水滴 1、刀子 1、錐 1、下水板 1
26	長文箱	文房具	1 合	縦9.7 横38.2 高8.4	
27	文箱	文房具	1 合	縦10.0 横26.0 高9.0	
28	色紙箱	文房具	1 合	縦24.2 横20.6 高8.7	
29	短冊箱	文房具	1 合	縦39.5 横10.1 高9.3	水滴 1、硯 1、下水板 1
30	香炉箱	香道具	1 合	縦17.5 横11.0 高11.2	香炉 2、盆 1
31	香盆（大・小）	香道具	2 口	(大) 縦17.4 横23.4 高2.1、 (小) 縦9.5 横13.7 高1.5	
32	沈箱	香道具	1 合	縦17.5 横12.0 高10.5	
33	炭団箱	香道具	1 合	縦17.8 横15.0 高10.3	炭団 9
34	匂箱	香道具	1 合	縦18.4 横24.6 高16.5	提盆 1
35	香枕	香道具	1 個	縦22.0 横12.0 高12.5	
36	香道具類	香道具	1 括		重香合 5、焚殻入 7、銀製香筋建 1、香匙 1、香箸 1、銀製香鉢 1、銀製灰押 1、銀製丸灰押 1、銀葉 6、銀葉台 1、箸 5

※文化庁が購入時に作成した調書をもとに、本調度に含まれる全36件を一覧にしたもの。器種の分類は筆者による。

※数字部分を濃く網掛けした器種は、すでに紀要16～19号にて木地構造を報告している。

※No. 3 鏡台の内容品については、紀要19号にて修正、今号より反映している。

※No.30香炉箱、No.36香道具類の内容品については、紀要17号にて修正、今号より反映している。

本号で取り上げる櫛台は、他の器種と比べると蒔絵表現が明らかに異なるうえ、木箱のつくりも異なっていることから、おそらく別に作られた同文の調度が含まれたものと考えられ、内容品についても他の道具からの移動が見られる。また、内容品の「白粉箱」は形状から「附子箱」とし、その文様や蒔絵表現の違いからもとは大小 1 組（本稿では「(大)」と「(中)」）と別の 1 合（本稿では「(小)」）であったと考えるが 3 合と数える。また「筒型油桶」は通例の呼称である「油桶」、「髷水入」は No. 3 に合わせて「髷盥」、「紙落」は類例が見つけれないことから「円筒形容器」とし、＜表 2＞のようにあらためることとした。

＜表 2＞

	名称	種類	員数	法量	内容品
9	櫛台	化粧道具	1 基	縦24.5 横34.9 高35.7	鏡 1、鏡箱 1、附子箱 3、橐形化粧合子 2、四方化粧合子 1、油桶 2、髷盥 1、耳盥形化粧水入 1、銀製童子 1、円筒形容器 1

1. X線 CT 調査

1-1. 方法

X線 CT 調査には、九州国立博物館の多種文化財用 X線 CT スキャナ（Y. CT Modular、エクスロン・インターナショナル株式会社）を使用した。まず、作品全体が収まるように撮影（以下、低倍率撮影）を行い、続いて角の接合部などを、より高倍率で撮影（以下、高倍率撮影）した。高倍率撮影の箇所は、通常は作品の左手前の角とし、櫛台については基台の左奥上角・左手前下角およ

び中段引出の左奥角・左手前角とした。また、櫛台の内容品に対しては高倍率撮影のみを適用した。撮影条件は、管電圧170kV（櫛箱は160kV、髭箱は180kV）、管電流1.2mA、プロジェクション数1080、インテグレーション時間400msとし、厚さ1.0mmのアルミニウムフィルタおよび厚さ0.5mmの銅フィルタを使用した。スキャン後に再構成によって得られる断層画像の分解能は＜表3＞の通りとした。

CTデータの解析には画像解析ソフトウェアVGSTUDIO MAX 2024.1（ポリウムグラフィックス株式会社）を使用した。解析の際に注目したポイントは、甲板、底板、側板の構造（一枚板かどうか）、甲板または底板と側板の接合方法、側板同士の接合方法、布着の仕方などである。甲板や底板の作りは主に低倍率撮影の画像で、その他の項目については主に高倍率撮影の画像で確認した。

＜表3＞

名称		低倍率撮影時分解能（mm/pixel）	高倍率撮影時分解能（mm/pixel）
櫛台	基台、引出	0.33	0.11（引出は0.086）
	鏡箱	－	0.10
	鏡箱以外の内容品	－	0.086
櫛箱	蓋、身、懸子	0.24	0.086
	櫛	－	0.086または0.096
払箱	蓋、身、懸子	0.36	0.086（蓋のみ0.12）
	櫛	－	0.086
元結箱	蓋、身	0.30	0.086
髭箱	蓋、身、懸子	0.28	0.095（身のみ0.10）

1-2. 結果

X線CT撮影の結果、各作品の木地には、一部の例外を除き、木目が密で良質な針葉樹（ヒノキ）が使用されていることが明らかになった。また、木地の亀裂などは少なく、どの作品も健全な状態にあると考えられる。以下、木地構造の特徴について、作品ごとにまとめる。

櫛台（原色図版26、図1）

入角長方形の盆形の天板、見込中央の板は2枚接で（図2）、接目に刻苧彫²⁾が確認できる。周縁の立上りは板上に載り（図3、4）、四隅を留継にし、入隅の内側には2個の別部材が足されている（図5）。盆形の天板と刳脚の接合は大入継である（図3、4）。左刳脚は2枚接、右刳脚および奥刳脚は一枚板となっている。刳脚同士の接合方法は留継としている（図6）。刳脚と基台の甲板の接合は芋付けである。基台の甲板は3枚接（図7）で、接目（器表側）にのみ刻苧彫が確認できる。基台の甲板と側板の接合は大入継である（図4）。基台の側板は、左側板、右側板、奥側板いずれも恐らく2枚接である。上段引出を受ける棚板は恐



図1

らく2枚接で、接目に刻苧彫は確認できない。中段引出を受ける棚板は2枚板であり、接目に刻苧彫は確認できない。両棚板と側板の接合は大入継である。底板は2枚接で、接目（底裏側）のみ刻苧彫が確認できる。底板と側板の接合は大入継である。四隅の柱は、盆形の天板下から底板上までそれぞれ一材である。脚はそれぞれ一材で、底板の四隅に芋付けされている（図3）。

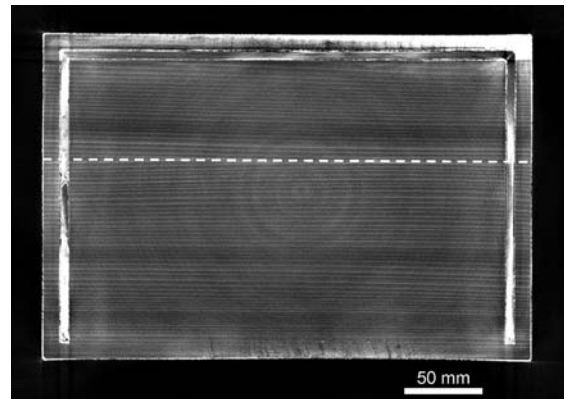


図2 盆形の天板、見込中央の板の水平断面。上から見たところ。破線は部材の境界を表す（以下同）。

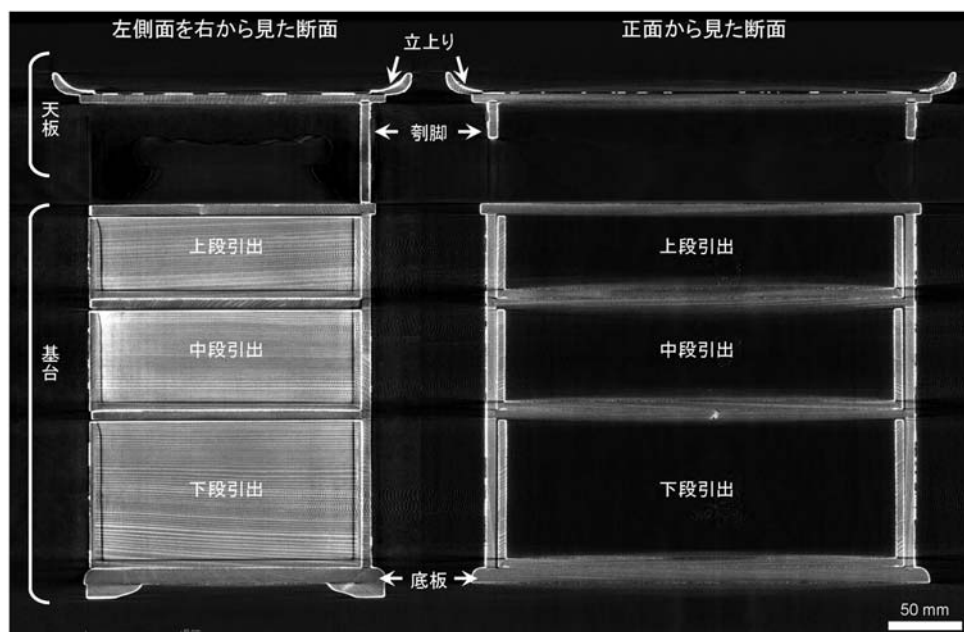


図3 左側面を右から見た鉛直断面（左）および前後中央付近を正面から見た鉛直断面（右）

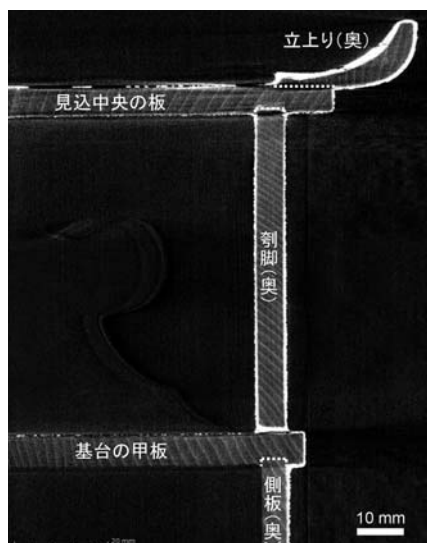


図4 天板および台上部の奥側面を右から見た鉛直断面。

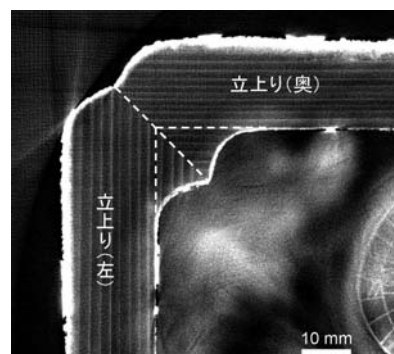


図5 天板の左奥角の立上り同士の接合部。上から見た水平断面。

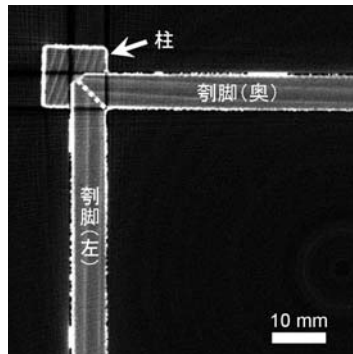


図6 天板の左奥角の刳脚同士の接合部。上から見た水平断面。なお、破線以外の黒い線はアーチファクト⁽³⁾であり、部材の境界や亀裂ではない（以降、図19、21、39などでも同様）。

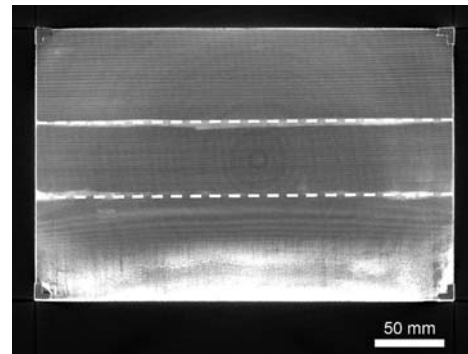


図7 基台の甲板の水平断面。上から見たところ。

上段、中段、下段の引出の前板、向板、側板はそれぞれ一枚板である。上段引出および下段引出の底板は一枚板であり、中段引出の底板は2枚接で、その接目の上下には刻苧彫が確認できる。各引出の前板、向板、側板の接合は留継であり、前板と側板の接合部では、板厚が異なるため隙間を埋めている（図8、丸で囲った部分）。引出の底は入れ底である。

布着は、盆形の天板および立上りの全面、盆下の刳脚の器表側・身内側・下端全面（四隅の柱に覆われている部分含む）、基台の甲板の上面および側面全面、基台の側板の器表側全面（四隅の柱に覆われている部分除く）および左右側板の身内側の一部（正面側）、底板の上面の一部（正面側）および下全面、引出を受ける棚板の一部（正面側）、四隅の柱の周囲全面に渡ると考えられる（図9）。また、脚の外側、下側全面にも確認できるが、内側の曲面にあるかは不明である。引出の布着は内外全面に渡ると考えられる。

鏡箱

蓋甲板は一材で、周縁に1枚の側板を回している（図10）。身の底板は一材から成る。身の側板は二重で、身内側の側板は底板の上に載り、立上りは身内側の側板を削っている

（図10）。底板の周縁には器表側の側板を回しており、接合部には刻苧彫が確認できる（図10）。蓋および身の各側板には身内側に筋彫（ケビキ）を入れており、筋の間隔は蓋側板で5～6 mm、身の器表側の側板で約6 mm、身内側の側板で約7 mmである。布着は、蓋の器表側全面および側板の身内側、並びに身の底板周縁および側板両面に渡ると考えられる（図11）。

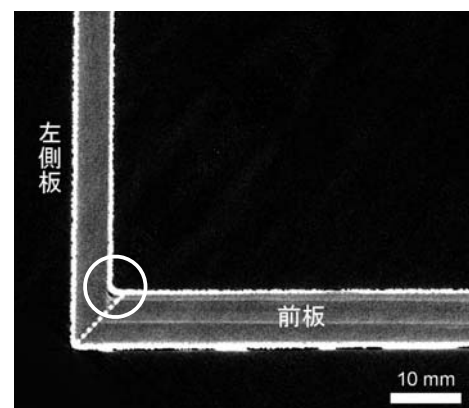


図8 中段引出の左手前角の水平断面。上から見たところ。

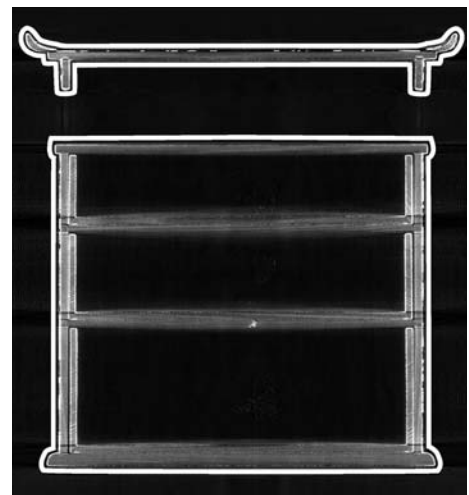


図9 正面から見た鉛直断面に、盆形の甲板および台の布着の範囲を白線で図示したもの。引出の布着は省略。

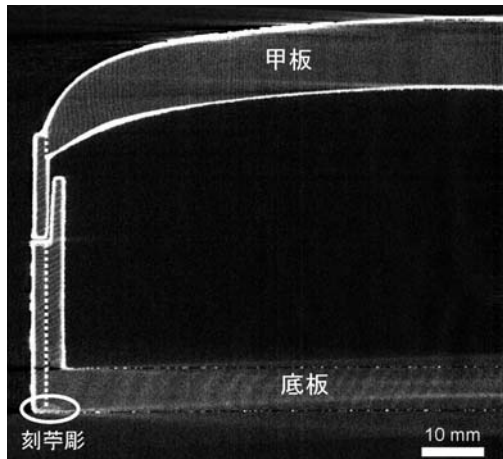


図10 鏡箱の鉛直断面。

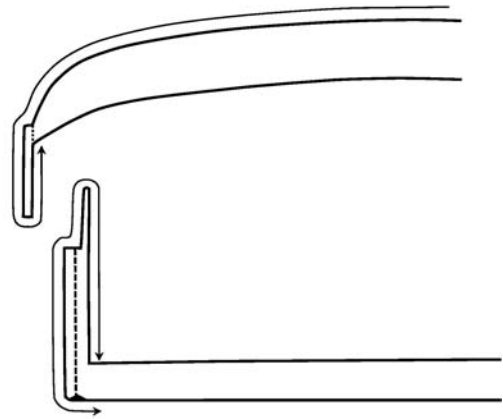


図11 鏡箱の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

附子箱（図12）

附子箱（大）の蓋甲板は一枚板で、上端をL字に欠いた側板上に載せているような形式である（図13）。蓋身とも、側板は一枚板で、側板同士の接合は留継である。底板も一枚板で、入れ底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる（図13）。この構造は、（中）および（小）と共通である。（大）および（中）の布着は、蓋身とも器表側全面に渡ると考えられ、（小）の布着は、身側板の身内側の下部を除く器表側・身内側全面に渡ると考えられる（図14）。

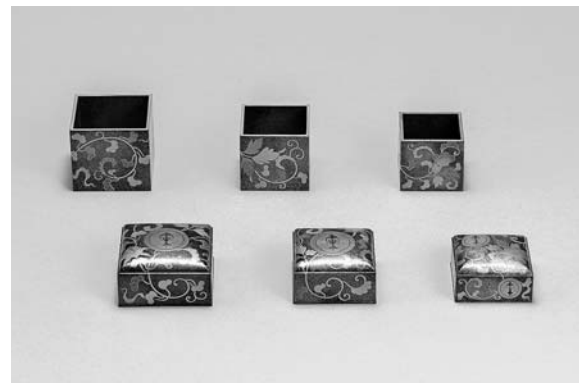


図12 左から（大）、（中）、（小）

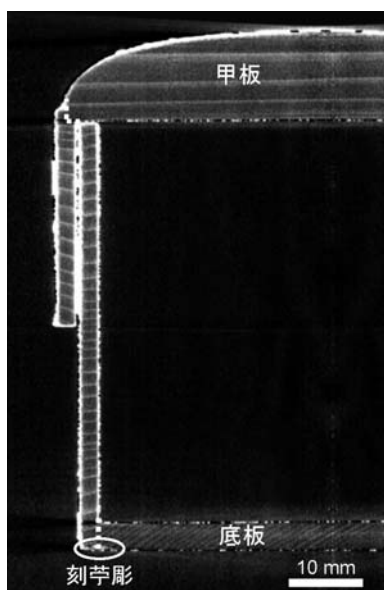


図13 附子箱（大）の鉛直断面。

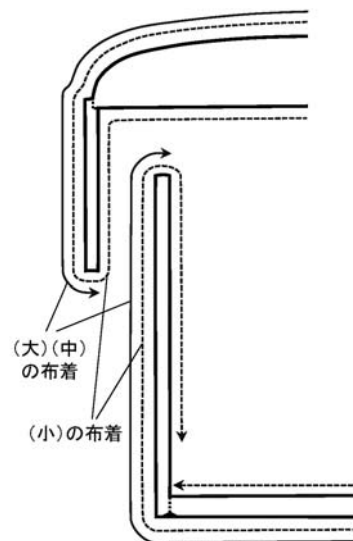


図14 附子箱の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

棗形化粧合子（図15）

身内が朱塗りの合子（図15・左）は、広葉樹材を用いた挽物で、蓋、身、懸子はそれぞれ一材である。布着は、蓋の器表側全面、身の底裏全面・器表側全面・立上りの身内側、懸子の底裏周縁・懸縁の身内側に渡ると考えられる（図16）。

身内が梨子地の合子（図15・右）も、広葉樹材を用いた挽物で、蓋、身、懸子はそれぞれ一材である。布着は確認できない。



図15

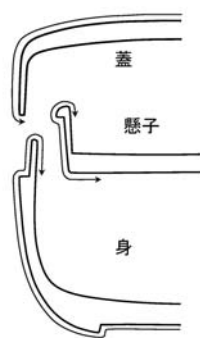


図16 棗形合子（内が朱塗り）の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

四方化粧合子

蓋甲板は一枚板で、側板の上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる（図17）。蓋の側板は一枚板で、側板同士の接合部は三角柱状の部材を介した丸角のつくりとなっている（図18）。身底板も一枚板で、入れ底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる（図17）。身の側板も一枚板で、側板同士の接合部は三角柱状の部材を介した丸角のつくりとなっている（図19）。立上りは側板と一体である。布着は、器表側全面に渡ると考えられる（図17）。

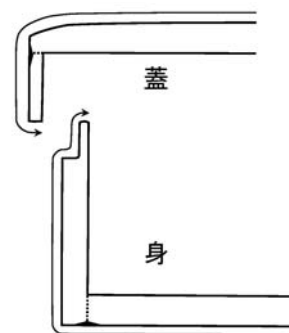


図17 四方合子の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

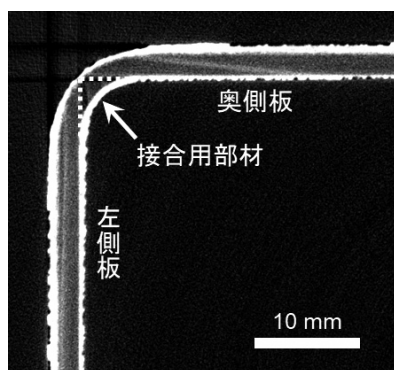


図18 四方合子・蓋の左奥角の水平断面。上から見たところ。

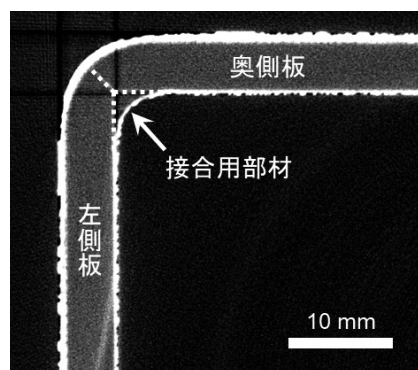


図19 四方合子・身の左奥角の水平断面。上から見たところ。

油桶（図20）

油桶①は広葉樹材を用いた挽物で、蓋、身、懸子はそれぞれ一材である（図21）。布着は恐らく施されていない。油桶②も挽物で、蓋、身、懸子はそれぞれ一材である。布着は蓋の器表側全面、身の器表側の上下一部に確認できる（図22）



図20 左① 右②

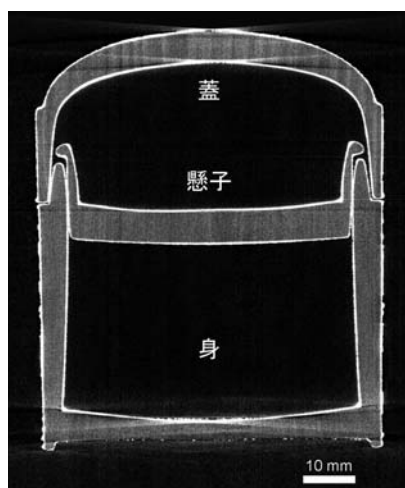


図21 油桶①の鉛直断面。

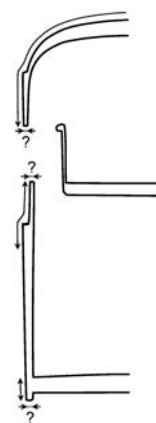


図22 油桶②の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。
(布着が不明瞭な部分は「？」としている、以下同)

髷盥

蓋および底板はそれぞれ一材で、底の構造は入れ底である（図23）。側板は1枚の板を回し、身内側に筋彫を約5mm間隔で入れている。布着は、蓋表全面、並びに身の底裏周縁および側板両面に渡ると考えられる（図23）。

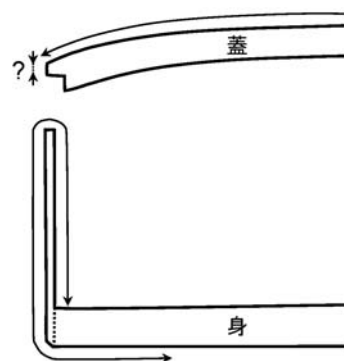


図23 髷盥の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

耳盥形化粧水入

耳以外は一材から成り、耳は別材となっている（図24）。布着については確認できない。

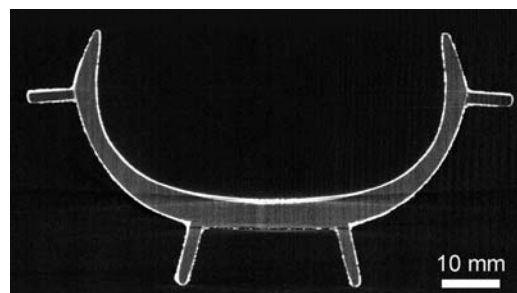


図24 耳盥形化粧水入の鉛直断面。

円筒形容器

側板は2材から成り、接合部には刻苧彫が確認できる（図25）。恐らく2材を合わせて挽いたものと考えられる。底板は一材で、底裏側の中央に小さな穴がある。入れ底となっており、側板と底板の接合部には刻苧彫が確認できる。布着は、側板器表側全面・底裏全面に確認できる（図26）。

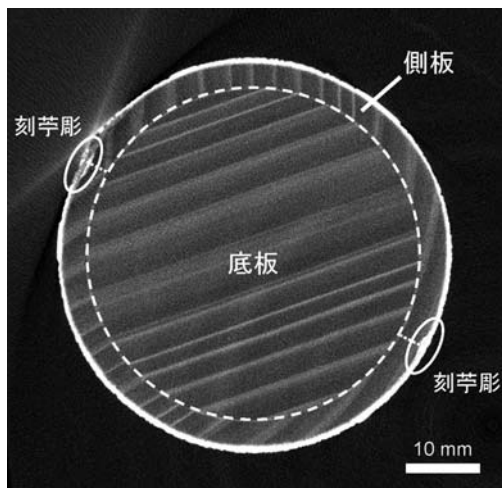


図25 円筒形容器の底部の水平断面。上から見たところ。



図26 円筒形容器の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

櫛箱（原色図版27、図27）

蓋甲板は一枚板で、上端をL字に欠いた側板上に載せているような形式である（図28）。蓋身とも、側板は一枚板で、側板同士の接合部では底面が台形の四角柱（以下、台形柱）状の部材を介している（図29）。身底板も一枚板で、入れ底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる。懸子の底板は一枚板で、入れ底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる。懸子の側板は一枚板で、側板同士の接合部は台形柱状の部材を介した丸角のつくりとなってい



図27

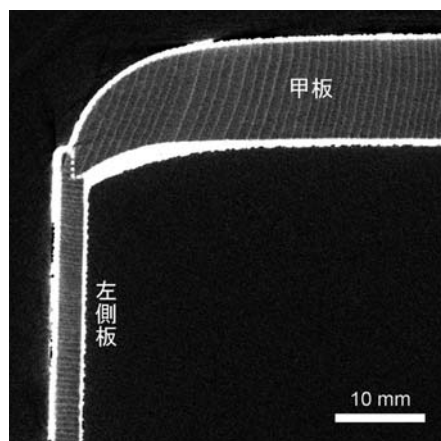


図28 蓋左手前角の鉛直断面。前から見たところ。

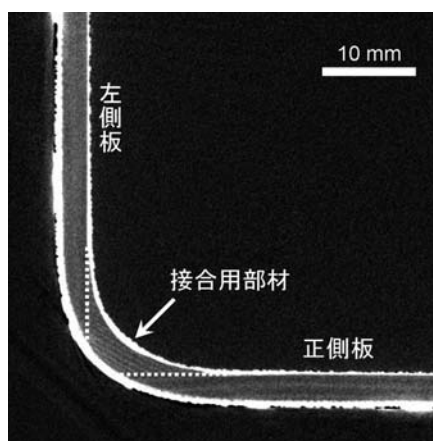


図29 蓋左手前角の水平断面。上から見たところ。

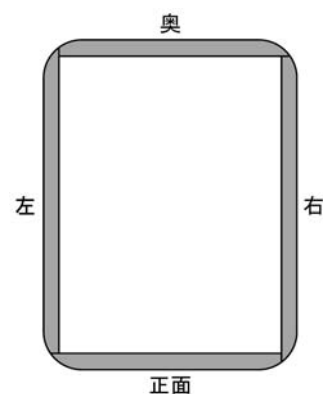


図30 懸縁同士の接合の模式図。

る。懸縁は側板と別材で、側板上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる。懸縁は図30のように組んでいると推定される。布着は、蓋の器表側全面、身の底裏周縁および側板器表側全面、懸子の底裏周縁・側板器表側全面・懸縁全面に渡ると考えられる（図31）。

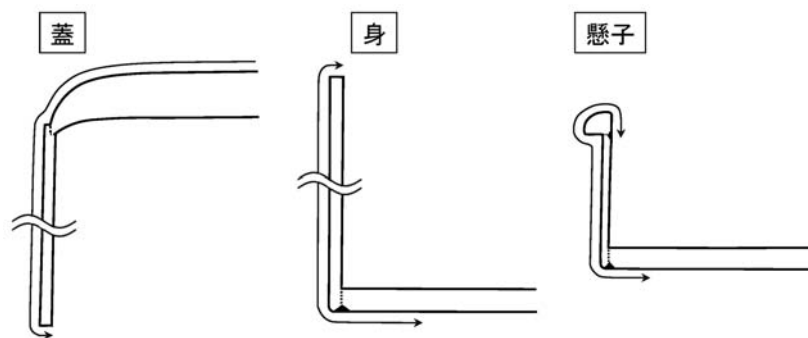


図31 蓋・身・懸子の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

櫛はそれぞれ広葉樹の一材から成る。

払箱（原色図版28、図32）

蓋甲板は2枚接（図33）で、上端をL字に欠いた側板上に載せているような形式である。甲板の正面右側には割れが確認でき（図33）、接目および割れの上下には刻苧彫が確認できる。また、甲板の正面右角付近には埋木も確認できる。蓋身とも、側板は一枚板で、側板同士の接合部は台形柱状の部材を介した丸角のつくりとなっている。底板は2枚接で、入れ底となっており、接目や接合部には刻苧彫が確認できる。懸子の底板も2枚接で、入れ底となっており、接目や接合部には刻苧彫が確認できる（図34）。懸子の側板は一枚板で、側板同士の接合部は台形柱状の部材を介した丸角のつくりとなっている。懸縁は側板と別材で、側板上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる（図34）。正面左角における懸縁の接合部では、櫛箱（図30）と同様に左側懸縁の木口⁽⁴⁾に正側懸縁の本端が接しているが、他の角では明確には確認できない。布着は、蓋の器表側全面および側板下部の身内側、身の底裏周縁・側板器表側全面・側板上部の身内側、懸子の底裏周縁・側板器表側全面・懸縁・側板身内側上部に渡ると考えられる（図34）。



図32

櫛はそれぞれ広葉樹の一材から成る。

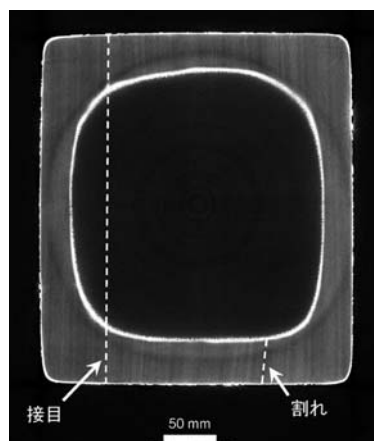


図33 蓋甲板の水平断面。
上から見たところ。

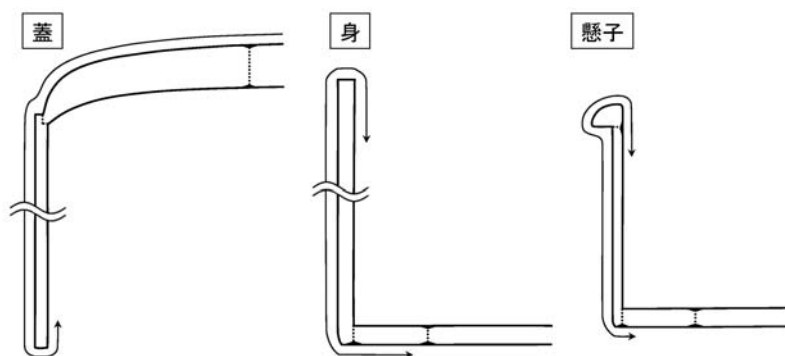


図34 蓋・身・懸子の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。
（身の底裏の布着は接ぎ目に及んでいる部分もある）

元結箱（原色図版29、図35）

蓋甲板は一枚板で、側板上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる。蓋身とも側板は一枚板で、側板同士の接合は留継である。底板も一枚板であるが、他と異なり「あて材」と思われる。底は入れ底で、接合部には刻苧彫が確認できる。布着は、蓋の器表側全面および側板下部の身内側、身の底裏周縁・側板器表側全面・側板上部の身内側に渡ると考えられる（図36）。



図35

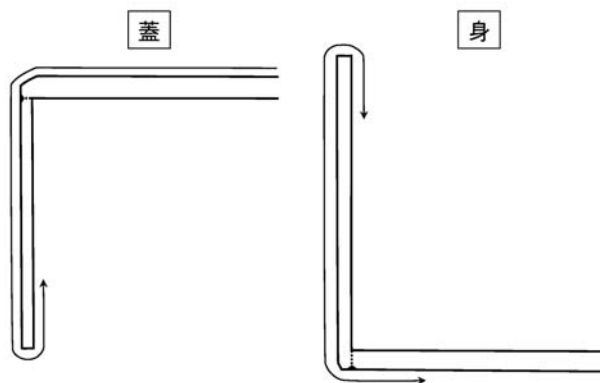


図36 蓋・身の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

髷箱（原色図版30、図37）

蓋甲板および側板はそれぞれ一枚板で、甲板は側板上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる。側板同士の接合は留継となっており、各接合部には1枚の薄い板を差し込んでいる（挽込留継）（図38、丸で囲った部分）。身底板は一枚板で、打付け底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる（図39）。身側板も一枚板で、上端の一部を欠いて立上りとし（図39）、側板同士の接合は留継である。懸子の底板は一枚板で、底は入れ底となっており、接合部には刻苧彫が確認できる。側板も一枚板で、側板同士の接合は



図37

留継である。懸縁は側板上に載り、接合部には刻苧彫が確認できる。懸縁は、櫛箱（図30）と同様に組んでいると推定される（ただし角は直角）。蓋身の布着は、蓋の器表側全面、身の底裏周縁・側板器表側全面および立上りの身内側に渡ると考えられる（図40）。懸子の布着は、底裏の周縁およびスリット付近、側板器表側全面、懸縁全面並びに側板身内側上部に渡ると考えられる（図40、41）。

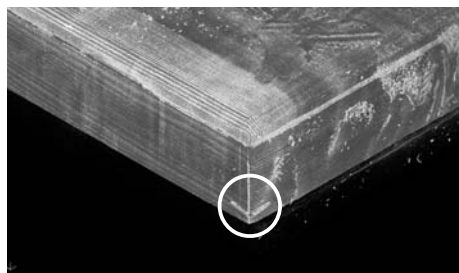


図38 蓋左手前角の三次元画像。

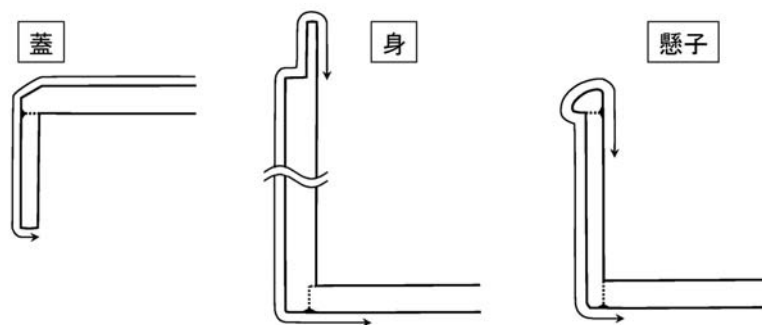


図40 蓋・身・懸子の鉛直断面の模式図および推定される布着の範囲。

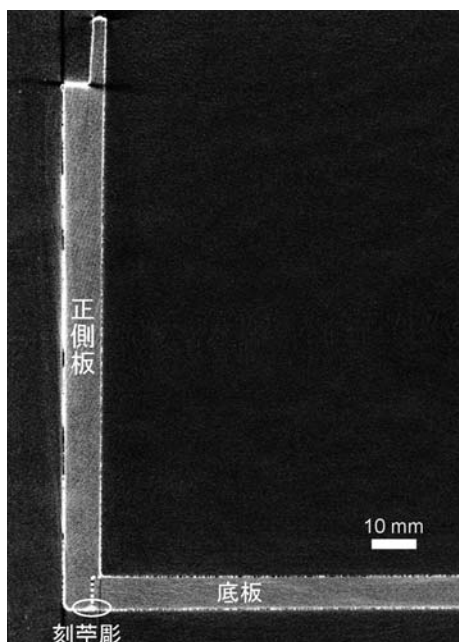


図39 身左手前角の鉛直断面。
右から見たところ。

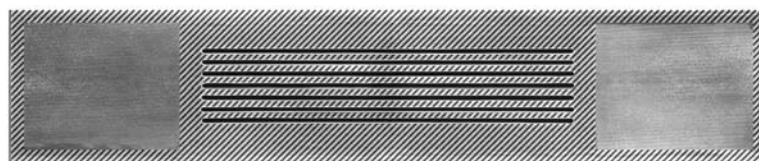


図41 懸子の底裏の水平断面。上から見たところ。
布着の範囲を斜線で示す。

2. まとめ

以上、化粧道具 5 件、櫛台、櫛箱、払箱、元結箱、髷箱について、木地構造の特徴を確認した。ここではこれまでの調査した器種とも比べながら、あらためて結果を考察する。

まず、櫛台であるが、先述のように本調度のうちでも蒔絵表現が明らかに異なっていることから、おそらく別の南部家ゆかりの婚礼調度のひとつであったものがある時期に移動したものと思われ、内容品も櫛台付属のもの、別の調度のものが混在している。ただし、櫛台に用いられている材は他の器種のそれと比べて、明らかな違いは見出せなかった。また、盆形の天板は以前解析した No. 31 香盆と同様の作りであり、長方形入角の盆の作り方に一定の作り方があったことも確認できた。附子箱（大・中）と（小）を比較すると、木地構造は同様であるものの布着せに違いがみとめられた。棗形化粧合子はどちらも広葉樹を用いた挽物であるが、同様の形状の合子は挽物が多い印象である。この櫛台内容品で広葉樹材を用いているものは油桶①、耳盥形化粧水入と円筒形容器だが、いずれも挽物や刳物で作られており、木地の加工方法に合わせて適した材を選択していることがわかる。しかしながら、同じ器種が同じ加工方法を取っているとは限らず、たとえば髷盥は針葉樹材を用いた指物であるが、以前調査した髷盥（No. 3 鏡台内容品）は広葉樹材を用いた刳物で、大きさや形

状は同様でも作り方に違いがあることは興味深い。

今回の調査対象は、櫛台以外は箱形の器種であり、箱の木地構造のデータを得ることができた。

＜表4＞は、この結果を、各調度の形状の特徴とともにまとめたものである。

＜表4＞

器種	蓋造	角造	甲盛の有無	甲板と蓋鬘の接合方法	底板と側板の接合方法	布着のおもな特徴
櫛箱	被蓋造	丸	甲盛あり	蓋鬘の上に甲板が載る、蓋鬘と塵居が一体。	底板の木口と木端に側板が接合。	蓋は甲板（の一部か）・蓋鬘外面、内面下部。身は底板の周縁から側板外面。
払箱	被蓋造	丸	甲盛あり	同上	同上	蓋は甲板・蓋鬘外面、内面下部。身は底板の周縁から側板外面、内面上部。
元結箱	被蓋造	角	甲盛なし	蓋鬘の上に甲板が載る	同上	同上
髷箱	印籠蓋造	角	甲盛なし	同上	同上	蓋は甲板・蓋鬘外面。身は底板の周縁から側板外面、内面上部。

櫛箱、払箱ともに甲盛／塵居あり・丸角・入底の箱であるが、これまで調査した同形の箱（たとえばNo.7大角赤手箱）と甲板と蓋鬘の接合方法、蓋身の側板同士の接合方法が共通することが確認できた。懸子も共通しており、こうした作り方が当時よくなされていたことがわかる。また、元結箱、髷箱はともに削面取・直角・入底の箱であるが、こちらもNo.29短冊箱と甲板と蓋鬘の接合方法、蓋身の側板同士の接合方法（留継）が同じであった。ただし同じく削面取をもつNo.28色紙箱とは甲板と蓋鬘の接合方法が異なっている。また、髷箱は、蓋鬘同士の接合部に刻みを入れて三角形の薄板を入れているのが確認できた（矩形挽込留継）。これは身や懸子には見られず、蓋の角の接合を強化する目的かと考える。この矩形挽込留継はNo.5柄鏡箱（小）の柄の部分にも見られ、柄鏡箱では中に入れる鏡の重みや、鏡の出し入れ時にかかる負荷を見越して、接合部を強化したものかと推測されるが、より大型の鏡を収める柄鏡箱（大・中）には見られないため、なぜこの方法を選択したのか、理由は判然としない。

今回調査した5件のうち4件（櫛箱、払箱、元結箱、髷箱）は箱形の器種で、箱形器種のデータも多くなってきた。我々は、これまでの経験から、箱であればその形状からおおよその構造が推測できるようになってきた感はあるが、中には通例に当てはまらないものもあり、当然ながら決まりきったものでないということもわかってきた。引き続き調査を通じて、本調度の、ひいては江戸時代中期の婚礼調度の制作技法について具体的な解明を目指していくことは変わらないが、今後は当時の木地師が持っていた技や構造に対する考え方、工夫についてもより着目していきたいと考える。

註

- (1) 本研究は、基盤研究A「アジアの文化財の伝統的製作・修理技法の詳細調査と国際修理プロジェクトへの応用」（研究課題／領域番号18H03598）（2018～2022年度）の成果に基づく調査であり、調査対象としている他の婚礼調度に国宝「初音の調度」（徳川美術館所蔵）がある。
- (2) 刻苧彫とは、接合部や割目に溝を彫り、木粉や繊維を漆に混ぜた刻苧を充填する手法のことで、木地の痩せを目立たなくする効果があると考えられる。
- (3) アーチファクトとは画像ノイズの一種であり、ここでは主に金属などX線吸収の高い物質に由来するメタルアーチファクトのことを指す。

叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について(5) 化粧道具（櫛台・櫛箱・払箱・元結箱・髷箱）

(4) 板材の切断面のうち、繊維の方向に垂直な断面を木口 {こぐち} という。一方、板材を木口側から見たとき、左右の側面を木端 {こば} という。

原色図版26～30、図1、12、15、20、27、32、35、37 落合晴彦撮影

図2～10、13、18、19、21、24、25、28、29、33、39、41 渡辺祐基撮影、渡辺祐基作成

図38 渡辺祐基撮影、田中麻美作成

図11、14、16、17、22、23、26、30、31、34、36、40 渡辺祐基作成

（かわばた のりこ 当館学芸部企画課特別展室長）

（わたなべ ひろき 当館学芸部博物館科学課環境保全室研究員）

（たなか あさみ 当館学芸部博物館科学課環境保全室研究補佐員）